

# 時の動き

## 沖繩の島々を襲う、 次元を超える軍事化

沖繩大学地域研究所特別研究員 毛利 孝雄



「変わらぬ基地、続く苦悩」は、昨年5月15日の琉球新報一面トップの見出しです。50年前と同じ見出しを使い、50年間変わることのなかった沖縄の現実を活写しました。

6月23日、4月28日、5月15日、これらは沖縄の戦後史を象徴する記憶の日々です。しかし、この一年の沖縄は、これらの持つ意味を検証する次元を超える事態に移行しているのではない。安保関連3文書とともに、沖縄の島々では戦場化を前提とした自衛隊配備・ミサイル基地化が急速に進んでいることです。北朝鮮による「衛

星」発射を奇貨として宮古・石垣・与那国に持ち込まれたPAC3は、現在（6月15日）も居座り続けています。米軍専用施設の70%集中に加え、自衛隊基地面積は復帰時の4・7倍に増えました。

### ■ 与那国島・石垣島では・・・

与那国島では、過疎対策と経済活性化のための自衛隊誘致を巡って住民の意見が2分する中で16年に沿岸監視部隊駐屯地が開設されました。町長は「米軍やミサイル配備はない」と説明

してきましたが、昨年末の日米合同演習では自衛隊機動戦闘車が公道を走り、訓練には米兵が初めて参加しました。政府は今後、電子戦部隊・地対空ミサイル部隊配備を予定しています。町長は軍事利用が想定される空港滑走路の延長・港灣整備を要請。さらに島外への避難者を助成する基金条例が検討される事態になっています。全島要塞化（硫黄島化）全島が基地となり自衛隊員以外の立ち入りは禁止にもつながる可能性も指摘されています。小さな与那国島を巡るこの10年、反対住民らの苦悩を考えると胸の



島々と世代をつなぎ開催された  
「5・21平和集会」  
(北谷球場前広場・小出由美さん撮影)

裂かれる思いがします。  
石垣島では、この3月に地対艦・地对空ミサイル部隊を配備する石垣駐屯地が開設されました。沖縄県の最高峰・於茂登岳中腹の緑を切り裂いた石垣駐屯地。周辺は、沖縄戦後の極貧の中で、また、戦後米軍による土地接収からこの地に入った沖縄島の人たちが、開拓し農業を軌道に乗せ、若い世代に引き継いできた場所です。沖縄戦と米占領史の断面を刻んだその土地

を、今度は自衛隊のために差し出せという二重・三重の理不尽を許せるでしょうか。工事開始を前に住民投票を求めた署名には、有権者の3人に一人が賛同したにもかかわらず、議会も司法も民意を無視し続けています。

### ■問われている

#### 私たちの戦後責任

急速に進む南西諸島の軍事化に対して、沖縄では「再び沖縄を戦場にさせない」ために、団体や世代を超えた新たな努力が始まっています(写真)。

また、玉城デニー知事による沖縄県独自の東アジア自治体平和外交がスタートし、県議会も決議で後押ししています。これらの動きを注視し連帯したい。

78年前のこの季節、沖縄戦は南部を中心に苛烈を極めていました。その沖縄戦からの最大の教訓は「軍隊は住

民を守らない」です。戦争をやらないうこと以外に住民を守る方法はありません。そして重要なことは、この教訓が戦後直後から始まった『鉄の暴風』編纂や「ひめゆり祈念館」に結実する字徒らの体験記録、字(まじ)自治組織、誌編さんのための体験者からの聞き取り、「平和の礎」刻銘のための悉皆(しつぱい)調査など、文字通り沖縄戦体験者をはじめ関係者の苦悩・葛藤・勇気・努力を通じて県民の中に「獲得されてきたもの」だという点です。

アウシュヴィッツ博物館の元館長で、自らもそこに政治犯として収容されていたカジミエシュ・スモレンさんは、若い世代のドイツ人見学者に次のように語ったといっています。

「君たちに戦争責任はない。でもそれを繰り返さない責任はある」

私たちにはいま、この「戦後責任」が問われていることを強く自覚したいと思います。(もっり たかお)